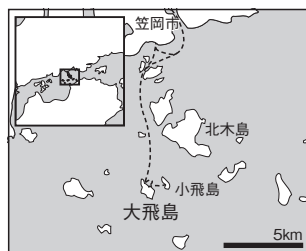


①大飛島おおびしま（岡山県笠岡市）——興譲館高等学校

離島の未来を拓く 新設通信制課程

興譲館高等学校 法人事務局長 堂野 博之



大飛島：笠岡港から約29km南方に位置する。面積1.05km²、周囲5.5km、人口93人（平成28年10月現在、小飛島を含む）。笠岡諸島は古くから瀬戸内海の交通の要衝で、大飛島付近は東西の潮が離合する場所とされ、往來の船が潮待ちした。また奈良・平安時代の祭祀遺跡が多く出土。

●伝統私立校が新たに開設した通信制課程

興譲館高等学校は、岡山県井原市に「郷校」として設立された創立一六四年の伝統校である。場所も名称も所属も変えずに存続する私立高校としては、日本でもっとも古い学校として伝えられている。本校は創設以来「白鹿洞書院揭示」という儒教の教えを校訓としており、人としての在り方、生き方を柱とした人間教育を実践している。

平成二六年初夏、翌年に開校を控えた通信制課程の準備にあたり教育環境やカリキュラムについて模索していたところ、瀬戸内海に浮かぶ小さな離島の小中学校が廃校になっていくという情報が入ってきた。笠岡諸島の大飛島は笠岡港から定期船で約五〇分、人口七〇人ほどの過疎の島で

ある（東隣りの小飛島とあわせて、飛島と呼ばれる）。近年島を離れる住民が多く、島の生活を維持することに大きな課題を抱えていた。

港に着くと目の前に廃校となった校舎が見える。校舎はモダンな建物でまだ新しく、今にも玄関から子どもたちが飛び出してくそうな雰囲気であるが、ひっそりと静まり返っている。校門には「飛島小学校」「飛島中学校」の看板が残っていた。たまたま出会った島のご婦人に校舎の中を案内していただき、島の現状を聞かせてもらった。「子どもがいなくなつて島も寂しくなりました」「あと二〇年もすれば、島の住民は誰もいなくなつてしまいますね」と微笑む。

周囲五キロほどの島を歩いて一周すると空き家が多く、なかには屋根まで草に覆われている家もあった。瀬戸内海



島の堤防に立つ通信制課程の生徒たち。

を一望できる「恋人岬」のベンチで休息をとりながら、通信制の教育ビジョンを思い巡らせる。日差しを反射する波がキラキラと輝いている。瀬戸内海の美しい潮目が芸術のように流れており、聞こえてくるのは風と潮の音だけだ。時間はゆっくりと流れていく。この島での活動は「離島での体験型スクーリング」、それだけではいけないのではないかと感じた。通信制

の子どもたちが島の将来を担うこと。島の方々に愛されること。それこそが私たちが求める本質的な学びなのではないか、という考えに至った。とにかくここで教育をしたい。その想いが私の心を動かした。

同年八月、私は笠岡市長を訪ねて廃校跡利用の要望を熱く語った。

●生徒たちが島の未来を拓く

島の過疎高齢化には歯止めがきかず、島の方々は生活を維持するだけで精一杯であった。島を訪れる方々は島の美しさに触れ、島を賞賛する言葉を並べる。「離島振興のために大規模なイベントを開催しては」と、観光客を呼ぶためのさまざまなアイデアを無責任に語る。島外の方に島を知ってもらうことは大切である。しかし、島の自治会長はいつも空しさを感じていたという。「島の道路の草を誰が刈る」「イベントが終わるといつもの生活に戻るだけ」といった言葉が、島の現状を物語っていた。観光地にしたいわけではない。島の将来を担う若者が必要なのだ。私は三年間の高校生活で何を学ぶのかという限定的なカリキュラムではなく、この島にとって必要な活動が先輩から後輩に受け継がれ、島の将来につながることは何かを考えていた。そのことを生徒たちがしっかりと認識し、共有していくことが大切になってくる。

●飛島をふるさとに

通信制課程の開設一年目は、



初めてのカヤック体験に笑顔が溢れる。

◆行政からみた通信制高校◆

本土からの距離約25kmに浮かぶ飛島^{ひしま}は大飛島と小飛島からなり、両島あわせて人口約90人、高齢化率が80%に迫る典型的な過疎高齢化の島である。かつては幼稚園および小学校、中学校を有していたが、少子高齢化が進み、児童や生徒の人数が減少したため、平成15年には中学校が、同26年には小学校と幼稚園がそれぞれ廃校、廃園となった。

子どもがいなくなり、集落の担い手不足から、日々の集落維持の活動は大多数を占める高齢者が担うこととなった。草刈り、港までの高齢者の送迎、各世帯への郵便、荷物の配達など島に暮らす人々の日々の生活を支える活動をはじめ、年に数回行われるイベントにおける島外者へのもてなしなど、その取り組みは多岐にわたる。また、介護予防の分野でも力を発揮するのは主に70歳代の婦人会の女性たち。「支える側も支えられる側も高齢者」の状況が続いていた。

こうした中、飛島に転機が訪れた。機会があって飛島を訪れた岡山県井原市にある私立興譲館高等学校の関係者が、四方を海に囲まれ、校舎の前に海が広がる飛島の環境に一目惚れしたのだ。

「この恵まれた環境の中で子どもたちの教育を行いたい」

この理念のもと、平成27年度から興譲館高等学校が新たに設置した通信制課程のスクーリング会場として、廃校となった旧飛島小学校の利用を始めたのだ。途絶えていた子どもたちの声が久しぶりに島に響いた。最初は、互いに模索しながらの活動だったが、飛島特有のヤブツバキを島外にPRする年に一度の「つばき祭り」に同校の吹奏楽部、チアリーディング部などがまさに学校をあげて参加し、盛り上げとサポートに役買ったことにより、興譲館高等学校の存在は飛島の人たちにとってなくてはならないものになった。その後も、同校は飛島を開催地として行われた笠岡諸島各島持ち回りで実施している島の大運動会のサポート、継続的なスクーリング会場としての活用を行っている。今年度は「もっと島に関わりたい」という子どもたちの発案から、月に一度地域のために行うボランティア活動にも生徒が積極的に参加するなど継続的に活動し、島外者である生徒が島の方々の集落維持活動の一部を支える立場にまでなりつつある。

また、興譲館高等学校の取り組みをきっかけとして、大飛島にカフェ兼簡易宿泊所が新たにオープンするなど、飛島への新たな人の流れが出来つつあるほか、笠岡本土と飛島を結ぶ航路の利用者も増加の傾向が見えはじめた。

国はこれから本格的に迎えようとする人口減少社会への対応として、地方創生に力点を置いている。瀬戸内海の小さな島で行われているこの活動の中にこそ、これからの人口減少社会に立ち向かう地方創生のヒントがあるのではないだろうか。

(岡山県笠岡市政策部企画政策課 茂見一壽)

思うように生徒が集まらず、数名からのスタートとなった。しかし、地元の生徒を中心に、島の運動会、笠岡諸島六島合同の大運動会、つばき祭りなどほとんどのイベントで、草刈

りや催事の準備、運動会の選手として参加させていただいた。島に渡る回数が増えるごとに、地元の方々と顔なじみになり、生徒たちにとって島が身近な存在へと変わっていった。



笠岡諸島6島合同の大運動会で、生徒たちは島の選手として活躍した。

島での活動をはじめて一年が経った頃、生徒の言動に変化が現れはじめた。「島に住んでもいいかも」「島の住民が減っていくと皆さんどうやって生活するのだろうか」。まるで親戚のおじいさんやおばあさんの心配をするように、島を身近に捉えはじめたのだ。「スクーリングだけじゃなく、毎月島へ行きたい」という生徒の要望に応え、平成二八年一月から、毎月一回の飛島スクーリングがスタートした。この活動は島のサポートがメイン。定期的な農道の草刈りや、椿油の搾油作業、イベントのサポートなどを行う。活動を継続するなかで、島の方々に自分の名前を覚えてもらえる。

声を掛けてもらえる。

感謝される。それらのささやかな喜びが子どもたちの良知を開花させる。

不登校を経験している少年が島の婦人と談笑する姿。そんな光景を目にすると、この島が生徒にとっての「ふるさと」になるのかも知れないと感じる。二〇年先には誰もいな

くなるといわれる島の現実が、子どもたちに何を与えてくれるのだろうか……。ゆつくりと見守っていききたい。

●飛島に芽生えた小さな希望

飛島における通信制課程のささやかな活動は、まだまだ離島振興のモデル事業というには程遠いであろう。しかし、第一期生に芽生えた小さな想いこそが、この島の希望の光であることに間違いはない。その芽をしつかりと育み、活動を継続させることが大切である。小規模で少人数の活動であっても、小さな離島ならではの活動があると感じている。

教室を飛び出し、社会や地域のなかで学んでいくという新しい教育観がここに存在する。この小さな離島「飛島」の未来を考えることが、通信制の教育の柱となっていく。

「島が私たちの学校です」

通信制を卒業した生徒たちが大人になり、家族とともに島に帰ってきてほしい。自分たちが育んだ小さな芽が、大きな木となり花が咲き、後輩たちに引き継がれていく。二〇年後の「飛島」も子どもたちの声が響き渡る島であることを願っている。

堂野博之（どうの ひろゆき）

昭和45年兵庫県尼崎市生まれ。平成元年、岡山県職員として就職。著書に自身の不登校体験を綴った『あかね色の空を見たよ』（平成10年、高文研）。同12年に同名の映画が完成、文部科学省特別選定映画に指定される。同20年、興譲館高等学校教育相談員に着任。同25年より現職。